

## サムエル記第二7章18-21節 「言葉にならない恵み」

### 1A 礼拝に対する情熱

1B 神の箱のエルサレム運搬

2B 杉材の王宮との比較

### 2A 神の大いなる恵み

1B ダビデの家を建てる約束

2B メシアが出て来る約束

### 3A 圧倒される祈り

1B 「私は何者なのでしょう」

2B 「はるか先のこと」

3B 「人に対するみ教え」

4B 「何を加えて」

## 本文

サムエル記第二 7 章を開いてください。まず、7 章 18-21 節をお読みします。「18 **ダビデ王は【主】の前に出て、座して言った。【神】、主よ、私は何者でしょうか。私の家はいったい何なのでしょう。あなたが私をここまで導いてくださったとは。19 【神】、主よ。このことがなお、あなたの御目には小さなことでしたのに、あなたはこのしもべの家にも、はるか先のことまで教えてくださいました。【神】、主よ、これが人に対するみおしえなのでしょう。20 ダビデはこの上、何を加えて、あなたに申し上げることができるでしょうか。【神】である主よ、あなたはこのしもべをよくご存じです。21 あなたは、ご自分のみことばのゆえに、そしてみこころのままに、この大いなることのすべてを行い、あなたのしもべに知らせてくださいました。」**

私たちは、マタイによる福音書を読み終えましたが、そこでイエス様は「ダビデの子」と呼ばれました。イエス・キリストの系図から始まりますが、原文では、「ダビデの子、アブラハムの子孫、イエス・キリストの系図」となっています。ダビデの子というのは、メシア、キリストを指す呼び名となっており、イエス様が死者の中から甦られてから、弟子たちによって礼拝をお受けになりました。ダビデ王の世継ぎの子である方が、王となり、礼拝を受けるにふさわしい方となったのです。

肉による父祖であるダビデの生涯を今朝、見て行きます。実は、カルバリーチャペルの牧師や宣教師たちの集まった、奥多摩でのリトリートのテーマは、「ダビデ: 神の心にかなう人(A Man After God's Heart)」というものでした。サムエル記第一 13 章 14 節に、ダビデについて「主はご自分の心にかなう人を求め、主はその人をご自分の民の君主に任命しておられる。」とあります。主の心にかなう人とまで呼ばれているダビデが、どのような心を持っていたのかを見て行きました。その

一つが、「神の恵みに圧倒されている心」と言ってもよいでしょう。ダビデが、自分の家を主が確立してくださることを示してくださり、ただその恵みに圧倒されている祈りを今、読みました。

### 1A 礼拝に対する情熱

弟子たちが、甦られたイエス様の前でひれ伏して、礼拝を捧げましたが、ダビデの特徴というのは「礼拝をする人」でありました。サウルから命を狙われている生活が、彼の死によって終わり、サウル家とダビデの家の内戦が七年半続きましたが、それもサウル家のイシュ・ボシェテが殺されることによって終わりました。北イスラエルの人々がダビデのところにやって来て、「あなたが、全イスラエルの王です」と言ったのです。そこでダビデは、ヘブロンからエルサレムに移り、そこを自分の町として、それからエルサレムがイスラエル国の首都となりました。

### 1B 神の箱のエルサレム運搬

そしてダビデが王位に着いて、初めに行なったのが何かと言いますと、「神の箱をエルサレムに移す」ということだったのです。神の箱とは、主がご自分の住まわれる幕屋において、その至聖所に置きなさいと命じられたものです。中には、神の十の戒めが書かれている板が収められているので、契約の箱とも呼ばれます。その上に純金で出来た宥めの蓋があり、御使いケルビムが掘られています。そこから、わたしはあなたがたに語ると言われました。つまり、そこは主ご自身が王座に着いていることを表しており、主がおられること、主が臨在されていることを表していたのです。かつてイスラエル人が神の箱をペリシテ人から奪い取られたもので、戻っては来たものの、祭司の家系の家にずっと安置されていました。ダビデは、そこから自分の町エルサレムに神の箱を運んできたのです。どうしてでしょうか？それは、自分の国イスラエルが神のご臨在を中心に生きてほしいと願ったからです。かつて、イスラエルが荒野の旅をしている時に、宿営の真ん中に幕屋があり、火の柱、雲の柱がその上に立っていました。それによって、天幕のどこからでも主が真ん中におられることを知ることができたのです。ダビデは王でありましたが、本当は神が王であられ、神によってイスラエルの民を支配していただきたいと強く願ったのです。

神がおられるところ、臨在しておられるところに、人々を導くということ。これが、教会が建てられている目的です。今や、聖霊がキリストを信じる者たちの内に住んでくださり、また信者の間に宿ってください、それによって私たち自身が神の宮とされています。そこで、主ご自身が真ん中におられて、そして主が御座からそのまま、御言葉を語ってくださることを知ることができるようにしてください。

### 2B 杉材の王宮との比較

ダビデの情熱は、その後も続きます。外から戦いも少なくなってきた、安息が与えられ始めていました。王宮を杉材で作っていて、そこに彼は落ち着いて住むことができるようになりました。けれども、彼の宮殿から見たのでしょうか、神の箱が安置されている天幕があります。それでダビデは、

自分の友である預言者ナタンに、「7:2 見なさい。この私が杉材の家に住んでいるのに、神の箱は天幕の中に宿っている。」と言いました。ナタンは、それはすごいことだと思って、「7:3 見なさい。あなたの心にあることをみな行いなさい。主があなたとともにおられるのですから。」と言いました。

## **2A 神の大いなる恵み**

### **1B ダビデの家を建てる約束**

ところが、主はナタンに、ダビデがご自分の家を建てることには同意していない旨を伝えておられます。それよりも、主がダビデを愛して、彼がご自分のために家を建てるのではなく、神ご自身がダビデのために家を建てる、つまりダビデの家系、ダビデの王朝を建てることを約束されています。ダビデの主を愛して、主のために何かを行いたいという思いと情熱はすばらしいです。けれども、主は、ダビデの主に対する行い以上に、惜しみなく豊かな恵みを降り注ぐことに興味がおありでした。私たちの神は、キリストにあって惜しみなく私たちに恵みを注がれたいと願われている方です。

まず、主は、「わたしがいつ、家を建てなさいと命じたのか？」と問われます。主は、荒野の旅をしているイスラエルに対して、ただ幕をかけるだけの幕屋の中に住まわれ、彼らの旅に共に歩んでこられたことを伝えます。主は、へりくだった方です。イスラエルが歩んでいる荒野に、そのそばにおられるために、彼らが主に礼拝することできるように寄り添っておられました。ご自分に何か豪華な建物を要求されなかったのです。礼拝は、複雑なものではなく、シンプルに、自分たちの持っているもの、自分たちの能力で献げることのできるものものによって、そこにご自身を表すように決めておられました。イエス様は、「わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。(マタイ 11:29)」と言われました。私たちの目に見える姿がたとえ見栄えのしないものであっても、むしろそこに主はご自分の栄光を明らかに表してくださるのです。

そして主は、ダビデを羊の番をしていたところから、イスラエルの君主としたことを思い起こしてくださっています。そして、君主にただだけでなく、すべての敵を絶ち滅ぼし、大いなる名をダビデに与えました。それから、民が定められたところで住み、恐れおののくことのないようにしてくださいました。私たちは、とても安全な社会に生きていますが、日々、誰かが襲って来るかもしれないという中で生きたら、神経がどれだけすり減ってもおかしくありません。けれども、安全でいられるようにしてくださいました。

ここまではダビデが、経験してきたことでした。彼に与えられた恵みを神は分かち合っておられます。けれども、ここからは将来の出来事です。ここは、そのまま読んだほうがいいのかもありませんね、12 節から 16 節までです。

12 あなたの日数が満ち、あなたが先祖とともに眠りにつくとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。13 彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。14 わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる。彼が不義を行ったときは、わたしは人の杖、人の子のむちをもって彼を懲らしめる。15 しかしわたしの恵みは、わたしが、あなたの前から取り除いたサウルからそれを取り去ったように、彼から取り去られることはない。16 あなたの家とあなたの王国は、あなたの前にとこしえまでも確かなものとなり、あなたの王座はとこしえまでも堅く立つ。』」

ダビデが王となるだけでなく、彼から出て来る世継ぎの子が王国を確立させます。そして、彼が主の名のために一つの家を建てます。ダビデではなく、彼の子が建てるのです。そして彼にとって、神は自分の父となって、神が彼にとっての子となります。彼が不義を行ったら、鞭をもって懲らしめられますが、それでもかつてのサウルのように王位が取り去られることはないと言われます。そして、ダビデの家とその王国は永久に確かなものである、王座も永久であるということです。

## 2B メシアが出て来る約束

ダビデは、これが自分の直接の息子において実現するだけでなく、はるか遠い将来にまで実現することを理解しました。彼にはソロモンが生まれました。そして確かにソロモンによって王国は確立し、彼が神殿をエルサレムに建てました。けれども、ソロモンは晩年に主と心は一つではありませんでした、偶像礼拝をするようになってしまいました。そしてダビデの王座は、バビロンによる捕囚によって途絶えてしまったかのように見えました。ですから、これはソロモンによって必ずしも、実現したわけではありません。その先がありました。そう、ダビデの子と後に呼ばれるようになる、キリストご自身によって確立します。

イザヤも預言しました(9:7-8)、エレミヤも預言しました(23:5-6)。ダビデの王座に着く者によって、王国が確立することを話しました。正義と平和でこの地が満ちます。そして、ゼカリヤはこの方が神殿を建てることを預言します。「ゼカ 6:12-13 彼にこう言え。『万軍の【主】はこう言われる。見よ、一人の人を。その名は若枝。彼は自分のいるところから芽を出し、【主】の神殿を建てる。彼が【主】の神殿を建て、彼が威光を帯び、王座に就いて支配する。その王座の傍らに一人の祭司がいて、二人の間には、平和の計画がある。』」

そして、自分の胎に、そのダビデの王座に着く者が宿されることを、御使いガブリエルがマリアに告げるのです。「ルカ 1:31-33 見なさい。あなたは身ごもって、男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。その子は大いなる者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また神である主は、彼にその父ダビデの王位をお与えになります。彼はとこしえにヤコブの家を治め、その支配に終わりはありません。」イエス様は、私たちに聖霊を送り、私たちが神の宮になるようにしてくださいました。それだけでなく、再び地上に戻り、文字通り地上に神の宮を建て、そこに自ら王座に着き、

世界を治められる時が来ます。

### 3A 圧倒される祈り

ダビデは、夜にナタンが受けたこれらの主の言葉を、伝え聞きました。それで彼は、天幕の中にある神の箱のところに行き、そこで座りました。そして、祈り始めます。

#### 1B 「私は何者なのでしょう」

18 節です、「【神】、主よ、私は何者でしょうか。私の家はいったい何なのでしょう。あなたが私をここまで導いてくださったとは。」ダビデは、エッサイという父の家で生まれました。何か由緒ある家系でも何でもありません。そして自分自身は羊飼いです。そんな自分がどうして、ここまで導いてくださったのですか？と祈っています。つまり、自分にはこのような祝福を受けるに、全く値しないと分かっていたのです。全く受けるに値しない者が、このような大きな祝福と栄光を受けているのです。この恵みに豊かさに、圧倒されています。

同じように、使徒パウロが自分に対する神の恵みに圧倒されている部分を読むことができます。「I コリ 15:8-10 そして最後に、月足らずで生まれた者のような私にも現れてくださいました。私は使徒の中では最も小さい者であり、神の教会を迫害したのですから、使徒と呼ばれるに値しない者です。ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは無駄にはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。働いたのは私ではなく、私とともにあった神の恵みなのですが。」パウロは、あまりにも恐ろしい過去を持っていました。キリスト者を育て上げるのではなく、彼らを迫害して、殺害さえたであろう、おぞましいことを行っていました。その彼が、福音を宣べ伝え、聖徒たちを助ける働きをしているのですから、使徒と呼ばれるに値しない者、使徒たちの中で最も小さい者であると言っています。

私たちが、キリスト者であると言う時に、そこにある大いなる祝福と恵みの響きがあることをお分かりでしょうか？天地を造られた神が、自分に心を留めておられます(詩 8:3-4)。その思いは、海の砂の総計よりも多いと詩篇にはあります(詩 139:17-18)。そして、心に留められているだけでなく、自分の犯した罪のことを思い出さず、その罪は赦して忘れ去ってください、惜しみない愛と恵みを注いでくださっているのです。ダビデも若い時の負い目を持っていました。「詩 25:7 私の若いころの罪や背きを、思い起こさないでください。あなたの恵みによって、私を覚えていてください。主よ、あなたのいつくしみのゆえに。」罪や咎を犯したのに、それでも主の前に立って、主にお仕えすることのできる恵みというのは、一体何なのでしょう！

私たちはしばしば、人がへりくだるためには、その人を懲らしめてやらないといけないと思います。けれども、ダビデの名前は「愛されている者」という意味がありますが、いかに愛されているかを知ることによってのみ、人は真実な意味で悔い改め、へりくだることができます。全く受けるの値しな

い者が、それでも、いやそれだからこそ主が大いなる憐れみを注ぎ、世に置いてのことに、全く正反対の働きを行ってくださるのです。受けるに値しない者に惜しみなく注いでくださるのですから。

## 2B 「はるか先のこと」

そしてダビデが圧倒されているのは、これまでのことではありません。これからのことが、あまりにも栄光に富んだものだったのです。19 節には、「【神】、主よ。このことがなお、あなたの御目には小さなことでしたのに、あなたはこのしもべの家にも、はるか先のことまで教えてくださいました。」と言っています。先に話したように、それは息子ソロモンのことだけでなく、彼が失敗しても、その後の子孫が失敗しても、それでも見捨てられることのない神の約束、そしてとこしえの御国をキリストによって確立する約束なのです。

エペソ書で、パウロは、私たちが罪と背きの中に死んでいたのに、キリストと共に生かしてくださったことを話しています。また、キリスト・イエスにあって、共に天上に座らせてくださったとあります。そして、こう言っているのです。「エペ 2:7 それは、キリスト・イエスにあって私たちに与えられた慈愛によって、この限りなく豊かな恵みを、来たるべき世々に示すためでした。」恵みの豊かさは、限りなく続くと言っています。そして、来るべき世々に渡って、その恵みが示されていくというのです。私たちは、天の御国において恵みに飽きることは一切ありません！むしろ、これまで「ええっ、そんなことあるの？」と言われるような無尽蔵の恵みに示されて、それで圧倒されて、それで自分がへりくだって、神を畏れかしこみつつ仕えるのです。あまりにも豊かな恵みがあるので、むしろその気前良い神、慈愛に満ちた神に畏怖を抱きます。

ダビデは、キリストを輩出する父祖になるのですが、私たちはそのキリストにあって、神の御国を受け継ぐものとされました。「エペ 1:10-11 時が満ちて計画が実行に移され、天にあるものも地にあるものも、一切のものが、キリストにあって、一つに集められることです。またキリストにあって、私たちは御国を受け継ぐ者となりました。すべてをみこころによる計画のままに行う方の目的にしたがい、あらかじめそのように定められていたのです。」すべてのものが一つに集められます。キリストが来られた時に、今、世界にあるものはすべてキリストに集められます。そして、それをもって神の国が始まります。その御国を受け継ぐ者となったのです！

このような豊かさがあるでしょうか？豊かさというのは、信頼から来ています。霊的には、神への信頼から来ています。以前もお話したことがあります。明治時代の伝道者、木村清松がアメリカに教会での説教の奉仕の後、ナイアガラの滝に連れて行かれ、「こんな大きな滝は日本にはないだろう。」と言われたそうです。けれども、彼は「このナイアガラの滝は、俺のおっさんが造ったのだ。」と答えました！「お前はインディアンの子孫か。」と問われたので、「わが父は天地を創造された神である。私はクリスチャンとなってその子どもとされた。故にこの滝もわが父・天のお父様のものだ。」いかがでしょうか？私たちは、目の前にあるもの、手元にあるもので自分の豊かさを押し

量っていないでしょうか？天にあるもの、地にあるものは、主のものであり、そして主のしもべのもの、神の子供のものなのです。

### 3B 「人に対するみ教え」

そして、「【神】、主よ、これが人に対するみおしえなのでしょうか。」と言っています。これは、人に対する教えではないことは明らかです。人に対する教えは、この世では、名誉を受けるべき人が受けます。富を持っている人々のところに人々が集まります。力ある者が支配します。貧しい者が富む者に仕えます。しかし、恵みの福音ではその反対です。心が貧しくされた者たちが、豊かにされます。力ある者が、弱い人の弱さを担います。富む者が貧しい者に仕えます。あらゆる神の富を持っておられるイエス様が、人と同じ姿になり、弟子たちの足を洗うほどに仕えられました。

### 4B 「何を加えて」

そして 20 節です、「**ダビデはこの上、何を加えて、あなたに申し上げることができるでしょうか。【神】である主よ、あなたはこのしもべをよくご存じです。**」ダビデは、言葉を失いました。けれども、ダビデほど、自分の感情を言語化できる人はいなかったと言えるのではないのでしょうか。詩篇を読めば、なんでここまで自分も深いところを感じているものを、ダビデが代表して書いていると思われる者がたくさんあります。彼は偉大な詩人です。しかしその彼が、神の圧倒的な恵みを前にして、言葉に言い尽くすことができなくなってしまったのです。それで、その言葉にできない心を、あなたにご存知ですと、言い表すことしかできていません。主は、これほどのことをしておられます。「**I ペテ 1:8 あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、今見てはいないけれども信じており、ことばに尽くせない、栄えに満ちた喜びに躍っています。**」ことばに尽くせない、栄えに満ちた喜びです。それは、信仰の結果であるたましいの救いを得ているからだ 9 節でペテロは言っています。

ここで大事なものは、「この上、何を加えて」であります。ダビデの神理解は、ここでのナタンを通しての神の言葉で、一気に深まりました。彼は、神の恵みを知っていました。サウルの手から自分を救ってくださったこと、神がいつも助けてくださったことなど、その恵みを知っていました。そして、それに応答して、お返ししたいと思っていました。それで神の箱をエルサレムに運ぶことも行ないました。神を心一杯に喜ばせたいと願ったのです。

けれども、彼が知らなかったのは、神にお返しすることはできない、ということです。神の恵みはあまりにも無尽蔵であり、豊かであり、私たちはただ、受け取って、「ありがとうございます」と言い、その場でひれ伏して、その中にたたく事しかできないということです。主の圧倒的な恵みに、圧倒されるしかできないのです。私たちが何かを神のためにして、神が何かをしてくださるという世界は、全くないのです。神が圧倒的な恵みをもって祝福してくださり、私たちはその恵みの中でへりくだり、主を恐れかしこみ、主から命じられたことを喜びをもって聞き従っていくことだけしかできない

のです。主のしもべとして、この方に喜んで仕えて、それで、神のこの広い心をもって、他の人々を見て、仕えていくことなのです。

私たちがどんなに価値のない存在、罪ある存在でも、それでも愛は変わらず、放蕩息子のよう  
に、大きな特権をもって祝福したいと願われておられます。その愛の中に留まってください。留まる  
時に、聖霊の働きによって、自分の心や思いが清められます。主の愛の中で休む時に、自分のそ  
の愛で心が溶かされ、周囲の人々をキリストの心の広さで見ることができるようになります。自意  
識から解放されて、キリスト意識に満たされるのです。

そして最後に、20 節、「**あなたは、ご自分のみこととばのゆえに、そしてみこころのままに、この  
大なることのすべてを行い、あなたのしもべに知らせてくださいました。**」とあります。ここには、  
神の真実と恵みが書かれています。真実とは、御言葉です。「**ご自分のみこととばのゆえに**」主は  
ご自分が言われたことは、必ずその通りにしていただきます。そして「**みこころのままに**」というの  
は、慈愛の心、恵みの心ということです。私たちが何かを行ったから恵むのではなく、そのようなご性  
質のゆえに恵むのです。私たちのほうに理由がありません、神のほうに私たちが選ばれた理由が  
あります。キリスト者となり、キリストに似た者として生き、そして御国を受け継ぐように選ばれてい  
るのは、私たちではなく、神に理由があります。もっぱら、その恵みと憐れみにあるのです。